

第1節 ラオス内戦史年表

1. ラーンサーン王国史

年	月日	
1354		ファーム王(Fa Ngum)がムアンを統合しラーンサーン(Lan Xang : 百万の象)王国建設
1373		ファーム王が退位、サムセータイ(Samsenthai)王即位
1479		ラーンサーン王国が黎朝聖宗の侵攻を受ける
1520		ポーティサーラート(Photisarath)王即位、仏教(上座部)の普及を行う
1527		ポーティサーラート王が守靈(ピー)信仰を禁ずる布告を發布
1560		セーターティラート王、アユタヤのチャクラパット(Chakrapat)王との間で友好と相互不可侵を誓う
1574		ビルマの侵攻を受ける
1637		スリニャウォンサー(Soulieng Vongsa)王即位、ラーンサーン王国の黄金時代を迎える
1641		オランダ東インド会社商人、ヴィエンチャン(Vientiane)に到来
1642		イエズス会士ヴィエンチャンに到来
1707		ラーンサーン王国、ヴィエンチャン王国とルアンパバーン(Luang Prabang)王国に分裂
1713		ヴィエンチャン王国からチャンパーサク(Champassak)王国が分裂、三王国へ
1753		ルアンパバーン王国、ビルマの侵攻を受ける
1778		シャム(Siam)、ヴィエンチャン王国を侵略し属国とする
1791		ヴィエンチャン王、ルアンパバーン王国を攻撃
1804		ヴィエンチャン王国、アヌ(Anourouth)王即位
1820		アヌ王、ルアンパバーンをシャムから解放(桜井・石澤)
1827		アヌ王、シャムに侵攻
1828		アヌ王、再びシャムに侵攻するが失敗、フエ(Hue)朝廷へ亡命(桜井・石澤)
1830		シャム、ラオスに侵攻
1831		シェンクアン(Xiang Khoang)王、アヌ王をシャムに引き渡す
1832		フエ朝廷明命帝、シェンクアンを併合しチャンニン政府とする(桜井・石澤)
1859	2.18	フランス軍、サイゴン(Saigon)を占領
1861	11.10	フランス人アンリ・ムオー(Henri Mouhot)、ルアンパバーンに入る
1862	2.	コーチシナ(Cochinchina)にフランス行政機構ができる(桜井・石澤)
	6.5	フエ朝廷、フランスと第1次サイゴン条約を調印し、ヴィエトナム南部3省を割譲(桜井・石澤)
1867	4.20	ドゥ・ラグレ(Doudart de Lagrée)率いるフランス探検隊、ルアンパバーンに到着(桜井・石澤)
	6.25	フランス、西部コーチシナ3省を占領(桜井・石澤)
1874	3.15	第2次サイゴン条約調印
1883	8.25	フエ条約、ヴィエトナム中・北部がフランスの保護国になる
1884	6.6	第2次フエ条約、ヴィエトナム全土がフランスの保護国になる。フランスがラオスにおけるフエ朝廷の宗主権を主張(桜井・石澤)
1886		フランス、ルアンパバーンに副領事館を設置。オーギュスト・パヴィ(Auguste Pavie)が副領

1886		事として赴任
1887	6.10	ホー(Ho)族がルアンパバーンを襲撃。オーギュスト・パヴィイはウンカム(Oun Kham)王と脱出し、王はフランスに保護を求める(桜井・石澤)
	10.17	インドシナ(Indochina)連邦成立
1890		フランス、メコン川左岸に進出しシャムに圧力をかける(桜井・石澤)

2. フランス植民地時代と独立闘争

1893	5.	フランス、下ラオスのメコン川左岸を占拠(桜井・石澤)
	10.3	フランス・シャム条約、シャムはメコン川左岸およびメコン川中の諸小島の権利を放棄。シャムはラオスに対するフランスの保護権を承認する
1894		ルアンパバーン王国にフランス弁務官駐在
1895	6.30	フランス・中国協定、中国との境界が画定
	12.3	フランス・ルアンパバーン王国協定、フランスの保護権を承認
	12.15	ウンカム王死去、サッカリン(Zakarine)王即位(桜井・石澤)
1896	1.15	英仏協定締結、ビルマとの境界が画定
1899	4.19	インドシナ連邦に正式に編入され、フランスは植民地行政の呼称として「ラオス」を使用する。サワナケート(Savannakhet)に理事官が派遣される
1900		首都をヴィエンチャンに定める
1901	4.	ポーカドゥアット(Pho Kduat)率いるラーオ族農民の反乱。ボラヴェン(Bolaven)高原でカー(Kha)族の反乱
	4.	ボラヴェン高原でアラク(Alak)族オン・ケオ(Ong Keo)による反乱(後にコムマダム:Kommadam に引き継がれる)
1904	2.13	フランス・シャム協約、モンブラオ(サイニャブリー:Sainyaboury)とチャンパーサク地域を割譲
	3.25	サッカリン王死去、シーサワンウォン(Sisavang Vong)王即位(桜井・石澤)
1907	3.23	フランス・シャム条約、バタンバン(Battambang)とシエムリアップ(Siem Reap)を仏領カンボジアに割譲
1914	11.	北部ムアンシン(Muang Sing)でルー(Lou)族首長オンカム(Ong Kham)による反乱
1918		パーチャイ(Pachai)率いるモン(Hmong)族による反乱
1920		フランス、各県に諮問会議設置
1923		フランス、理事長官の諮問機関として原住民諮問会議を設置
1924	6.	グエン・アイ・クオック(Nguyen Ai Quoc、後のホー・チ・ミン:Ho Chi Minh)、広東に青年革命同志会を設立(桜井・石澤)
1926	8.25	フランス・シャム条約、ラオス西側の境界画定
1929	3.	ヴェトナムのハノイに最初の共産党組織誕生
	5.1	第1回青年同志会大会が香港で開催されるが共産党設立をめぐる分裂(桜井・石澤)
1930	2.3	ヴェトナム共産党成立
	10.	ヴェトナム共産党、党名をインドシナ共産党(Indochina Communist Party:ICP)に改称
1933		ヴィエンチャン、サワナケート、タケーク(Thakhek)、パクセー(Pakse)などの都市で、ヴェトナム人社会を中心に党組織が結成される(古)
1934	9.	インドシナ共産党のラオス地方委員会が結成されるが、ラオス人の結集に成功せず1935年には事実上崩壊する(古)

1935	3.27	マカオでインドシナ共産党第1回大会開催
	8.20	コミンテルン(Comintern)第7回大会。ヨーロッパにおけるファシズムとの戦争危機に対して、人民戦線結成を決議(古)
1936	7.	共産党中央委員会、人民戦線の設立を決議(桜井・石澤)
1938	3.	共産党中央委員会、インドシナ民主統一戦線を結成(桜井・石澤)
1940	9.13	タイ、フランスにメコン川左岸の返還を要求(桜井・石澤)
	11.28	タイ・仏印戦争勃発
1941	1.31	日本の調停により停戦
	5.9	東京条約、フランスはメコン川西岸をタイに割譲
	8.29	フランス・ラオス保護条約、ルアンパバーン王国の地位を強化
1944	6.	自由ラオス運動(Lao Seri)が自由タイ運動(Thai Seri)の支援により形成される。指導者はウン・サナニコーン(Oun Sananikone)
1945	3.9	日本軍、仏印処理により仏印軍を武装解除
	3.9	ラオスのヴィエトミン(Viet Minh)支持者が反仏のピラを配布する
	4.8	ルアンパバーン国王シーサワンウォンが独立を宣言
	8.15	日本降伏、第2次世界大戦終結
	8.18	ベサラート(Phetsarat)首相、ラーオ・イサラ(Lao Issara)委員会設立
	8.30	シーサワンウォン国王がフランスの保護権継続を宣言
	9.1	ベサラートが独立を再確認する宣言を行う
	9.2	ホー・チ・ミン、ヴィエトナム民主共和国の独立を宣言
	9.2	フランス、降下部隊の一部をルアンパバーンへ派遣(桜井・石澤)
	9.14	フランス、チャンパーサクのブン・ウム(Boun Oum)殿下の協力により、バクセーを占拠
	9.15	ベサラート首相がラオスの統一を宣言
	10.6	スパヌウォン(Soupanouvong)殿下、ヴィエトナム護衛兵と共にサワンナケートに到着
	10.10	シーサワンウォン国王、ベサラート首相を解任
	10.12	ラーオ・イサラ人民代表者議会開催。暫定憲法を採択し臨時人民政府(ラーオ・イサラ政府)樹立
	10.20	ラーオ・イサラ政府、シーサワンウォン国王の解任を宣言
	10.30	ラーオ・イサラとヴィエトミン、軍事協定締結
	11.1	スパヌウォンがヴィエンチャンに戻り、ラーオ・イサラ政府国防大臣兼総司令官に就任
	11.10	シーサワンウォン国王、退位を承諾しラーオ・イサラ政府を認める
	11.11	インドシナ共産党解散
1946	1~2	フランス軍、ラオス北部に復帰(L/Z)
	3.21	スパヌウォン、タケークの戦いで重傷を負う
	4.23	ラーオ・イサラ政府、シーサワンウォン国王の復位を承認
	4.24	フランス軍、ヴィエンチャンを占領。ラーオ・イサラ政府はタイに亡命
	5.13	フランス軍、ルアンパバーンを管理下に置く
	7.	スパヌウォン、ハノイに向かいヴィエトミンと接触
	8.27	フランス・ラオス暫定協定、ラオスはフランス連合内でルアンパバーン王の下に統一される
	9.23	フランス軍、バン・フエイサイ(Ban Houei Sai)を奪う
	10.	東部ラオス抗戦委員会が国道7号線で軍事活動開始
	11.17	フランス・タイ協定。1941年にタイに割譲した領土を返還(ワシントン条約)(桜井・石澤)
	12.15	政権議会選挙を実施し、44人が選出される

1946	12.19	ハノイでフランス軍とヴィエトミンが衝突、第1次インドシナ戦争開始
	2.17	フランス軍がハノイを占領
1947	5.11	国民投票を行い7章44条からなる憲法を発布。ラオスは立憲君主国となる
	8.	国民議会選挙実施
	11.	シンカポ(Singapo)とプーミ・ノサワン(Phoumi Nosavan)がラオス東部での抗仏闘争に参加するためタイを出発 (Th)
1948	11.26	第1回国会開会、スワンナラート殿下(Souvannarath)を首相に第1次王国政府発足
	年後半	ラーオ・イサラ解放勢力がラオス西部から東部に徐々に移動する (L/Z)
1948	1.23	第1回政府閣僚会議開催
	1.23	ラーオ・イサラ亡命政府内が分裂
1949	1.20	カイソン・ボムウィハーン(Kaysone Phomvihane)が後のパテート・ラーオ(Pathet Lao)軍事勢力となるラサウォン(Raxavong)団を形成
	2.	スパヌウォン、イサラゲリラのための政治組織、Progressive People's Organization 形成
	5.16	スパヌウォン、ラーオ・イサラ亡命政府から離脱
	7.19	フランス・ラオス協定、フランス連合内でラオスが独立
	10.24	ラーオ・イサラ亡命政府は解散し、スワンナ・プーマ(Souvanna Phouma)を筆頭にほとんどの指導者はヴィエンチャンに戻るが、ペサラート殿下はバンコクに留まる
	11.	スパヌウォン、北ヴィエトナムでホー・チ・ミンと会談
	1950	2.7
1950	2.27	プイ・サナニコーン(Phoui Sananikone)内閣発足
	3.27	フランス、アメリカに武器支援を要請 (桜井・石澤)
	5.25	アメリカ、インドシナに関する対仏援助を開始 (桜井・石澤)
	8.13-15	ヴィエトミン支配地域で第1回人民代表者大会を開催し、ラオス自由戦線(Neo Lao Issara : ネーオ・ラーオ・イサラ)と抗戦政府樹立を宣言
	1951	2.
1951	3.11	リエンヴィエト(ヴィエトナム民族連合戦線)の主唱により、ネーオ・ラーオ・イサラはクメール抵抗派の3派とインドシナ統一戦線を形成し、3国の完全解放を目標に定めた (桜井・石澤)
	9.9	プイ・サナニコーン内閣とアメリカ臨時代理大使との間でアメリカ・ラオス経済援助協定調印
	11.21	スワンナ・プーマ、王国政府首相に就任
	1952	10.14
1953	4.12	ラーオ・イサラ勢力とヴィエトミン、西北部地域へ侵攻
	4.	ヴィエトミン軍、ラオスに侵攻しサムヌア(Sam Neua)を解放
	4.	バン・ナム・バック(Ban Nam Bak)までヴィエトミン軍が侵攻
	5.	ヴィエトミン軍、東北、中、南部に進出
	5.6-7.16	アメリカ中央情報局(Central Intelligence Agency : CIA)所有のCivil Air Transport (CAT)、フランスのマークが入ったアメリカ空軍C-119輸送機でフランス軍に軍事物資を投下する
	8.24	プーマ首相、フランスに権限委譲を要求
	10.15	権限委譲についてパリで交渉開始
	10.22	フランス・ラオス友好連合条約、ラオス王国の完全独立を認める
	12.12	ヴィエトナム北部のライチャウ(Lai Chau)解放。この頃ラオス中部一帯も解放される (桜井・石澤)

1953

12.18

ヴィエトミン軍、タケークを占拠

3 . 内戦史

- 1954
1. ヴィエトナム人民軍、中部西方のラオス国境地帯に攻撃（桜井・石澤）
 - 3.17 人民軍によるディエン・ビエン・フー(Dien Bien Phu)作戦開始（桜井・石澤）
 - 5.7 ディエン・ビエン・フー陥落、フランス軍が敗退
 - 5.8 インドシナ問題を討議するためのジュネーブ会議開催。王国政府はブイ・サナニコーンが代表として参加するが、抗戦政府代表ヌーハック・ブンサワン(Nouhak Phoumsavan)の参加は認められない
 - 6.6 周恩来首相、ラオスからヴィエトミン軍の撤退に合意
 - 7.21 ジュネーブ協定調印。停戦、外国軍の撤退等が規定され、ポンサリー(Phong Saly)、サムヌアの北部2県がパテート・ラーオ再結集地域になる
 - 9.18 ク・ウォラウオン(Kou Voravong)国防相が暗殺される
 - 10.20 プーマ首相辞任（Ste）
 11. アメリカ統合参謀本部は国務省に対して、軍事的視点からラオス王国軍を支援すべきではないと提案
 - 11.27 カターイ・ドン・サソリット(Katay Don Sasorith)内閣発足
 12. 王国政府とパテート・ラーオ交渉開始
- 1955
- 1.1 アメリカの軍事・経済支援、United Sates Operation Mission (USOM)開始
 1. アメリカ国務省、ヴィエンチャンの外交ミッションに王国軍の適切な規模を提案するよう依頼。提案は23,600人だったが、最終的には25,000人に増員される
 - 1.3 カターイがパテート・ラーオとの協議を開始するが4月に決裂
 - 3.22 全国人民代表者大会が開催され、ラオス人民党(Lao People's Party)が形成される
 - 4.18 王国政府とパテート・ラーオ、ジャール平原(Plain of Jar)で会談（桜井・石澤）
 - 4.23 カターイ首相と北ヴィエトナムのファン・バン・ドン(Pham Van Dong)首相、ラオスの政治問題は国内問題と言う見解で合意
 - 5.11 ランゲーンで王国政府とパテート・ラーオ代表が協議を行う（桜井・石澤）
 - 5.13 ハイフォン(Haiphong)のフランス軍が撤退し、ヴィエトナムは17度線以北が完全解放される（桜井・石澤）
 6. ポンサリーとサムヌアで軍事統合を実施するため、交渉を開始する
 6. 王国政府、サムヌアにヴィエトナムから軍事物資が輸送されていると国際監視委員会(International Control Commission)に抗議を行う
 7. キニム・ポルセナ(Quinim Pholsena)、平和・中立党を設立
 - 10.11 カターイ首相とスパヌウォンがランゲーンで会談
 - 10.26 ゴ・ディン・ジエム(Ngo Din Diem)、ヴィエトナム共和国大統領に就任（桜井・石澤）
 11. 国際監視委員会、6月の王国政府の抗議に基づき調査を行う
 12. アメリカ国務省、ラオスへの軍事援助をプログラム評価事務局(Program Evaluation Office : PEO)の管理下に置く
 - 12.25 総選挙を行うがパテート・ラーオは不参加
- 1956
- 1.6 ラオス自由戦線(ネーオ・ラーオ・イサラ)全国大会開催。ラオス愛国戦線(Neo Lao Hak Sat : ネーオ・ラーオ・ハク・サート)に改称し、政治綱領を採択
 - 1.7 国際監視委員会は決議を採択し、王国政府は北部2県で行政を確立する権利があるとパテート・ラーオに対して提言を行う
- 1956

- 2.13 カターイ首相辞任 (Ste)
- 3.20 スワンナ・ブーマ、王国政府首相に復帰
- 5.8 ジュネーブ会議共同議長国、ヴィエトナムの統一選挙実施を南北に要請
- 5.11 ヴィエトナム民主共和国(北ヴィエトナム)が南ヴィエトナムに統一予備会談を申し入れる
(桜井・石澤)
- 7.7 南ヴィエトナムのジエム政権、統一選挙を拒否(桜井・石澤)
- 8.1 ブーマとスパヌウォンが会談
- 8.5 ブーマとスパヌウォンが共同声明発表。連合政府樹立で合意
- 8.25 ブーマ首相、中国を訪問。周恩来首相と会談し共同声明発表
- 8.29 ブーマ首相、北ヴィエトナムを訪問。ファン・バン・ドン首相と会談し共同声明発表
- 12. ラオス愛国戦線が政党として活動することで合意
- 1957 1. 中国がラオスに無条件の支援を申し入れるが、ブーマは拒否する
- 2.21 王国政府と愛国戦線、連合政府と統一選挙方法について合意(桜井・石澤)
- 3.11 ラオスが対日賠償請求を放棄(桜井・石澤)
- 5.30 国会がパテート・ラーオとの合意を否決。ブーマ首相辞任(Stu)
- 8.9 ブーマ新内閣成立(Stu)
- 10.16 ブーマとスパヌウォンの間で合意が成立(Ste)
- 11.2 ヴィエンチャン協定が調印され、連合政府樹立で合意
- 11.18 ボンサリー、サムヌアの北部2県を王国政府に返還。サムヌアでは知事が王国政府、副知事はパテート・ラーオ、ボンサリーは知事がパテート・ラーオ、副知事は王国政府側人物が就任
- 11.19 第1次連合政府成立。愛国戦線からスパヌウォンとブーミ・ウォンウィチット(Phoumi Vongvichit)が入閣
- 1958 2.18 パテート・ラーオ軍(1501人)の王国軍への統合式典がジャール平原で行われる
- 3.5 国際監視委員会、パテート・ラーオの王国軍への統合が達成されたと報告
- 5.4 北部2県統合のための補欠選挙開催。愛国戦線が21議席中9議席、平和・中立党が4議席を獲得し、左派が勝利を収める
- 6.10 右派若手によって、国益擁護委員会(Committee for the Defense of the National Interests : CDNI)が設立される
- 6.30 アメリカ、ラオスへの援助停止(C)
- 7.19 国際監視委員会、無期限の休会を宣言
- 7.23 国会不信任案が可決されブーマ首相辞任
- 8.18 プイ・サナニコーン内閣発足。愛国戦線閣僚を排除し親米政権を確立する
- 9. 南ヴィエトナム外相がヴィエンチャン訪問
- 9. サナニコーン首相、南ヴィエトナム、台湾と国交を樹立する
- 10. アメリカが援助再開(C)
- 12. 北ヴィエトナム、王国政府による国境侵害を抗議
- 12.15 北ヴィエトナム軍、セボン(Sepon)近くを占拠
- 12.23-29 北ヴィエトナム、国境地帯に軍隊を派遣
- 1959 1.15 国会、プイ・サナニコーンに1年間の特権を付与
- 1.24 内閣改造、ブーミ・ノサワン(Phoumi Nosavan)将軍ら軍人3人が入閣
- 1. 南ヴィエトナム、北ヴィエトナムからの侵入を防ぐために、ラオス王国軍と南部ラオスで合同作戦を開始
- 1959

- 2.11 プイ・サニコーン首相、王国政府はジュネーブ協定に拘束されないと宣言
- 5. ヴィエトナム労働党中央委員会開催。南ヴィエトナムでの闘争拡大を決定する (L/Z)
- 5.11 王国政府、パテート・ラーオ軍 2 個大隊に 24 時間以内に投降するよう最後通告
- 5.13 スパーヌウォン、王国政府により自宅軟禁に置かれる
- 5.16 愛国戦線機関誌ラーオ・ハク・サート (Lao Hak Sat) が王国政府によって発禁となる
- 5.17 ルアンパバーン南部のパテート・ラーオ第 1 大隊、王国政府への統合に合意
- 5.18 中国外務省、ラオス情勢に関して公式に「内戦」という言葉を使用する
- 5.19 ジャール平原のパテート・ラーオ第 2 大隊逃亡
- 6.6 スパーヌウォン、自宅軟禁から解放
- 7. サムヌアの王国政府前哨地をゲリラが攻撃
- 7.23 アメリカ、サニコーンの要求に応え、王国政府軍を 2 万 5000 人から 2 万 9000 人に増強するため技術要員増加を発表
- 7.29 王国政府、サムヌアの反政府勢力は北ヴィエトナムから完全に支援されていると発表。スパーヌウォンら愛国戦線幹部を逮捕、監禁する
- 8.1 ヴィエトナム労働党機関紙ニャンザン(Nhan Dan)が、アメリカ帝国主義者がラオス・ヴィエトナム関係の緊張を生みだしていると非難 (L/Z)
- 8.4 王国政府、ポンサリー、サムヌア、シェンクアン、カムアン(Khammouan)、サワンナケート 5 県に国家非常事態宣言を発令
- 8.5 パテート・ラーオ第 1 大隊の一部がジャングルに逃亡する
- 8.29 愛国戦線勢力、サムヌアで攻勢をかける (桜井・石澤)
- 9.4 王国政府、国連に北ヴィエトナム軍のラオス国内での活動について 2 回目の訴えを行う
- 9.7 プイ・サニコーンの要求に応え国連安全保障理事会開催
- 9.15 ラオスに調査委員会が派遣されるが、北ヴィエトナムが国境を越え直接戦闘を行っていることを示す明確な証拠はないと報告
- 10.14 ベサラート殿下死亡
- 10.29 シーサワンウォン国王死去、サワンワッタナー(Savang Vatthana)王即位
- 12.17 国会、次回選挙まで国会の委任統治権延長を可決。CDNI は反対
- 12.30 プイ・サニコーン首相辞任
- 12.31 プーミ・ノサワン将軍率いる軍が権力掌握
- 1960 1.4 アメリカ、イギリス、フランスの各大使が国王にノサワン将軍を首相に任命しないよう要求
- 1.7 ク・アパイ(Kou Aphai)国王評議会議長 (King's Council) が総選挙までの臨時政府形成
- 4.24 総選挙実施。パテート・ラーオ支配下にあるサムヌアで愛国戦線候補者が 13 票しか獲得できないなど、右派と CIA の明らかな介入により右派が勝利
- 5.23 スパーヌウォンら愛国戦線幹部脱走
- 6.2 ソムサニット(Prince Somsanith)殿下が首相に就任 (Ste)
- 8.9 コン・レ(Kong Le)大尉によるクーデター発生。コン・レは中立派内閣の形成を要求
- 8.14 ソムサニット首相が辞任 (Ste)
- 8.15 ノサワン将軍、反クーデター委員会を設立し戒厳令を宣言
- 8.16 スワンナ・プーマ第 3 次内閣発足。愛国戦線に交渉を呼びかける
- 8.23 プーマ、サワンナケートでノサワン将軍と会談。
- 8.24 ラジオ・パテート・ラーオ、スパーヌウォンのコメントとして、コン・レーのクーデターを支持する声明を発表
- 1960 9. サムヌア北部でパテート・ラーオが解放区建設を再び開始

- 9.1 ノサワン将軍転覆計画をアメリカが察知、将軍はサワンナケートに移動 (Ste)
- 9.10 ノサワン将軍、サワンナケートでブン・ウム殿下を議長とする革命委員会を形成
- 9.18 ラジオ・パテート・ラーオ、スパーヌウォンに忠誠なゲリラ勢力は、プーマ軍との衝突を避けるよう命令が下ったと発表
- 9.中 エア・アメリカ(Air America)によるノサワン軍への支援が始まる
- 9.28 パテート・ラーオ、サムヌアのカムコン・ウォンナラート(Khamkong Vongnarath)大佐率いる歩兵大隊を攻撃
- 10.2 パテート・ラーオ、カムコン軍を捕らえムアン・ペン(Muang Peun)を占拠
- 10.7 プーマ政府がソ連と国交樹立
- 10.7 プーマ首相、アメリカによる援助が停止されたと発表。同じくアメリカ国務省も9月分の援助はヴィエンチャン政府に支払われていないと発表
- 10.11 王国政府とパテート・ラーオ、ヴィエンチャンで交渉再開
- 10.12 アメリカの前ラオス大使グラハム・パーソンズがプーマ首相と会談、パテート・ラーオとの交渉停止を求める
- 10.13 アレクサンダー・アブラモフ(Aleksandr N. Abramov)がソ連初の大使としてヴィエンチャンに到着
- 10.17 アメリカ国務省、プーマ政府への援助再開を発表
- 10.27 ソ連によるコン・レ軍への空輸が始まる
- 11.7 スパーヌウォン、5月の脱走後初めてサムヌアに到着
- 11.11 ブン・ウムの革命委員会、ルアンパバーンを占領
- 11.18 プーマ首相、サムヌアでスパーヌウォンと会談、連合政府樹立で合意
- 11.22 プーマ首相、ソ連の軍事・経済援助を要請
- 11.22 ノサワン軍、中立派勢力への攻撃開始
- 11.23 ノサワン軍、アメリカの支援により国道13号線を北上しヴィエンチャンに向かう
- 12.初 ヴィエンチャンでコン・レ軍とノサワン軍による衝突が始まる(ヴィエンチャンの戦い)
- 12.8 王国政府軍ヴィエンチャン軍管区クパシット・アパイ(Kouprasith Abhay)大佐によるクーデター未遂事件発生
- 12.9 プーマ首相、スントン・パタンマウォン(Sounthone Pathammavong)将軍に権限を委譲しカンボジアへ亡命
- 12.10 キニム・ボルセナ外相、ロシアとの間でコン・レ軍がパテート・ラーオと同盟を結ぶことで合意。これにより、中立派がロシアからの軍事支援を獲得
- 12.11 スントン将軍、キニム・ボルセナ外相に権限委譲
- 12.12 国会議員59人の内40人がサワンナケートに集まり議会を開催。プーマ内閣不信任案を可決
- 12.12 プーマ首相を罷免する国王令。これによりブン・ウム政府成立
- 12.13 ヴィエンチャンで戦闘開始
- 12.13 ソ連、外交文書の中でアメリカがプーマを首相とするラオス政府の主権を侵害し、プーマ・ノサワン反政府勢力への支援を拡大していると非難する (C)
- 12.16 ノサワン軍、ヴィエンチャンを占領
- 12.17 アメリカは13日のソ連の非難に対して、ソ連は反政府勢力に軍事物資を空輸していると非難(C)
- 12.20 南ヴィエトナム解放民族戦線設立。南ヴィエトナムへの物資供給ルートを確保するために、北ヴィエトナムにとってラオス南部が戦略的重要地域となる(桜井・石澤)
- 1960 12.22 パテート・ラーオとコン・レ軍、サラプーコーン(Sala Phou Khoum)の戦いで、戦略的に重要

- なルアンパバーン南部の7号線と13号線の合流点を占拠 (Th)
- 12.30 北ヴェトナム軍、ジャール平原のムアン・スイ(Muang Soui)近くに降下
- 12.31 ブン・ウム政府、北ヴェトナムの5個大隊が国境を越え、7号線近くのノンハット(Nonghet)を攻撃したと発表
- 12.31 ソ連の輸送機、ヴァンヴィエン(Vangviang)でコン・レ軍を乗せ、ジャール平原南部に降下させる(C)

- 1961 1.1 カンボジアのシアヌーク殿下、ラオス問題に関する国際会議開催を提案するが、アメリカは拒否
- 1.3 コン・レ軍とパテート・ラーオ、ジャール平原を占拠
- 1.4 国会代表がヴィエンチャンに集まり、ブン・ウム政府を承認。プーミ・ノサワン将軍は副首相兼国防相に就任
- 1.6 ソ連のフルシチョフ(Khrushchev)書記長は演説の中で、ラオス問題でアメリカとの戦争を回避するため、対話を望んでいることを示す (Th)
1. アメリカ、6機の AT-6 をノサワン軍に提供
- 1.20 ジョン F. ケネディー(John F. Kennedy)がアメリカ大統領に就任
- 2.初 ケネディー大統領、ラオス政策を検討するため、国務省、軍、CIA 等の代表から構成される委員会を設置
- 2.19 サワンワッタナー国王、ラオスの中立を宣言
- 2.20 プーマはジャール平原に向かい、カンカーイ(Khang Khay)でキニム・ポルセナ外相とコン・レ軍等に合流。この頃までにカンカーイにはプーマ中立派、パテート・ラーオ、北ヴィエトナム軍の3つ拠点が形成されていた (L/Z)
- 3.9 ヴィエンチャンとルアンババーンを結ぶ主要地域サラブーコーンをパテート・ラーオが占拠
- 3.9 ケネディー大統領、沖縄駐留の特別部隊(Task Force) 116 に警戒態勢を取るよう命令を下す (C)
- 3.10 プーマとノサワン将軍がプノンペンで会談。両者は外国の介入に反対する共同コミュニケを発表
- 3.23 ケネディー大統領、ラオスの中立支持を表明し、イギリスが提案していた国際会議開催に同意
- 3.23 パテート・ラーオ、カムアン県カムカート(Khamkeut)を攻撃し占拠
- 3.23 アメリカの偵察機、シェンクアンで撃ち落とされる
- 3.27 ソ連のプラウダ紙、国際会議開催に同意するコメントを掲載
- 3.31 パテート・ラーオ、シェンクアン南部タートム(Thathom)を占拠
- 3.末 パテート・ラーオ勢力がポンサリー、ルアンババーン、シェンクアン、ヴィエンチャン、カムアンの6県を支配下に置く
- 3.末 プーマ、アメリカ大使アヴェレル・ハリマン(Averell Harriman)とニューデリーで会談し、ラオスは共産主義から守られるべきだという見解を示す(Th)
- 4.3-7 ソ連機、ヴァンヴィエンにコン・レ軍部隊を降下させる
- 4.4 ソ連、停戦を国際会議の前提条件としないが、交渉にとって好ましい環境を形成するとし、実質上の停戦を北ヴィエトナムに促す
- 4.18 ブン・ウム政府、アメリカに軍事顧問団の派遣を要請
- 4.19 アメリカ政府、軍事顧問の地位を民間 PEO から正規の軍事顧問支援団(Military Assistance Advisory Group : MAAG)へ変更
- 4.22 1カ月以上行われていた国道 13 号線の戦闘で、パテート・ラーオは派遣されていたアメリカの特殊部隊訓練チーム 599、「Team Moon」を破る (C)
- 1961 4.24 イギリスとソ連、ラオスの停戦と国際会議の開催を呼びかけ、5月12日にジュネーブで開催すると発表
- 4.28 インドのニューデリーで国際監視委員会が会議を開催する (Th)
- 5.3 午前8時に停戦。しかし、パテート・ラーオはサワンナケート県ムアン・パラン(Muang Phalane)を占拠し、ノサワン軍はバクサン近くのハットボー(Hat Bo)村を占拠
- 5.5 両軍幹部が会談

- 5.8 国際監視委員会がラオスに復帰
- 5.11 左派、中立派、右派の3派による会談がナーモーン(Namone)村で開始
- 5.12 国際監視委員会、ジャール平原に到着(Th)
- 5.13 3派代表が停戦文書に調印
- 5.15-未 パテート・ラーオ、停戦を違反しジャール平原南部のパドン(Padong)でモン族を攻撃
- 5.16 ジュネーブ会議開催。プーマ中立派からキニム・ポルセナ、パテート・ラーオからプーミ・ウォンウィチットが出席、王国政府右派はブイ・サナニコーンがパテート・ラーオの出席に抗議し参加を拒否
- 5.17 3派代表、ナーモーン村で暫定連合政府樹立に合意
- 5.31 この頃までにパテート・ラーオ勢力は1万6000人に増員 (L/Z)
- 5.31 国際監視委員会がカンカーイでプーマ、スパヌウォンと会談。両者はパドンにアメリカの軍事要員が駐留していると抗議 (Th)
- 6.3-4 ケネディー大統領とフルシチョフ書記長がウィーンで会談し、ラオスの中立と独立を支持する共同声明を発表
- 6.6 6月初めからモン族支配下のパドンで戦闘が行われていたが、パテート・ラーオが占拠(Th)
- 6.7 ナーモーン村で会談中のノサワン派、国際監視委員会のパドンの査察を他2派に正式に要求。パテート・ラーオは「原則」同意する
- 6.12 国際監視委員会、ジュネーブへの報告でパドンの戦闘は停戦後最も激しい両派による衝突だが、停戦は継続しているという認識を示す (Th)
- 6.16 アメリカ、南ヴェトナム駐留の軍事顧問団を685人に増加(桜井・石澤)
- 6.19-22 プーマ、スパヌウォン、ブン・ウムの3殿下が3派を代表しチューリッヒで会談。連合政府樹立で合意する
- 7. ノサワン将軍、バンコクでサリット元帥と会談 (Th)
- 7.5 国際金融基金(International Monetary Fund : IMF)および世界銀行(World Bank)に加盟(桜井・石澤)
- 8.10 モン族部隊がシェンクアンを攻撃 (Th)
- 8.14 ナーモーン村で3派が会談
- 9.15 プーマはランゲーンでアメリカのハリマンと会談。アメリカは閣僚の構成について要求を出す。プーマを首班とする連合政府樹立については原則同意 (Th)
- 10.6-8 ヒンフップ(Hin Heup)村で3派首脳会談が行われ、プーマを連合政府の長とすることで合意(桜井・石澤)
- 10.18 プーマがガルアンパバーンを訪問、国王はプーマに政府形成を命じる
- 10.26 ケネディー大統領、南ヴェトナムのジエム政権への援助強化を発表(桜井・石澤)
- 10.27 モン族部隊、シェンクアンを攻撃
- 11.11 スパヌウォン、ヴィエンチャンでの3派会談を提案
- 12.6 プーマがブン・ウムに問題解決の意志があるのかを問うメッセージを送る
- 1961 12.13 ブン・ウムがジャール平原での会談を提案 (Th)
- 12.14 ジャール平原で3派首脳会談を開催し、閣僚の割り振りで合意
- 12.18 ジュネーブ会議、3派首脳へ早急な問題解決を促す
- 12.27 3派首脳会談を行うため、プーマ、パテート・ラーオ幹部がヴィエンチャンに到着、しかし、ブン・ウムは公式会談を拒否
- 1962 1.18-19 ジュネーブで3派首脳会談を行う
- 1.25 パテート・ラーオ、ナムター周辺でノサワン派を攻撃

- 1.27 ノサワン将軍、ナムターの軍事強化を行う
2. プーマがアメリカ、イギリス、フランス大使と会談。プーマは西側諸国が自身を支持していることを確認し、次第にアメリカに接近する (Th)
- 2.1 パテート・ラーオ、ナムターにあるノサワン軍の滑走路を攻撃
- 2.3 パテート・ラーオ、ナムターの町を砲撃
- 2.9 アメリカ、軍事援助司令部をサイゴンに設置 (桜井・石澤)
- 2.12 パテート・ラーオによるナムターへの砲撃が激化
- 2.末 アメリカはノサワン将軍が連合政府に同意するよう、現金による援助を停止し圧力をかける
- 3.10 ブン・ウム、国会演説でプーマ首班による連合政府の形成は共産主義の支配に陥るだけだと非難
- 3 中 ソビエト共産党はアブラモフ大使を通じて、ヴェトナム、中国、ラオスに対してラオス問題はアジアの当該国に委ねる事を伝え、一定の距離を置き始める
- 3.24 タイのノンカイで、サリット元帥、ノサワン将軍、アメリカ国務次官補ハリマン (極東問題担当) による3者会談開催。ノサワン将軍に連合政権樹立に同意するよう求める
- 5.3 パテート・ラーオ、ナムターへ侵攻開始
- 5.6 パテート・ラーオ、ナムターを占拠
- 5.15 ケネディー大統領、3000人のアメリカ軍をタイに派遣することを発表
- 5.25 フルシチョフ書記長、ラオスの中立を支持すると発表
- 5.26 プーマが6月15日を連合政権樹立の期限と定める (Ste)
- 6.4 プーマは、ルアンパバーンに向かい国王と拝謁。プーマを首班に連合政府を形成することを確認 (Th)
- 6.7-8 ジャール平原で3派首脳会談開始
- 6.12 3派首脳、連合政府樹立と閣僚構成 (プーマが首相兼国防相、スパーヌウォンとノサワン将軍が副首相、その他は中立派が7、右派が4、パテート・ラーオが4閣僚を獲得する) について合意し、協定に調印
- 6.16 プーマがハノイでファン・ヴァン・ドン首相と会談。会談で北ヴェトナムは、ラオスを通じる南ヴェトナムへの補給ルート (ホー・チ・ミンルート) の存在を初めてプーマに認める (Th)
- 6.21 プーマとプーミ・ウォンウィチットがノサワン将軍と会談。連合政府樹立に最後まで反対していたノサワンを説得し合意に達する (Th)
- 6.23 ブン・ウムが正式に辞任し、プーマ首相の下に第2次連合政府樹立
7. この頃までにパテート・ラーオ勢力は1万9500人に増員
- 7.23 ジュネーブ協定、ラオスの中立を宣言し議定書に調印
- 7.27 プーマ首相、アメリカを訪問しケネディ大統領と会談
- 8.初 アメリカの偵察機、北ヴェトナムから戦車や装甲車を含む数百の軍事車両が国道7号線を通ってラオスに向かっているのを確認
- 1962 8.13 アメリカの偵察機一機が攻撃を受ける
- 9.7 中国、北ヴェトナム承認を発表 (桜井・石澤)
- 10.初 プーマ首相、アメリカ・ソ連両大使に孤立した中立派勢力 (コン・レ軍) への物資供給を求める
- 10.7 北ヴェトナム・ニュース通信が全ヴェトナム軍のラオスからの撤退を発表。しかし、実際はほとんどがラオスに残留。アメリカの軍事要員はこの日までにアメリカ人666人、フィリピン人技術者403人となる

- 10.8 国会開催、プーマ首相が1年間の全権付与を要求し承認される (L/Z)
- 10.10 スパーヌウォン、モスクワでフルシチョフと会談
- 11. ソ連、ラオスへの空輸停止。コン・レ軍への軍事供給が止まる
- 11.22 ノサワン副首相、中国、ソ連、北ヴェトナム訪問を開始
- 11.27 愛国戦線と王国政府、軍・警察の統合で合意
- 11.27 エア・アメリカの輸送機(コン・レ軍への物資供給目的)がジャーランド平原で撃ち落とされる

- 1963 2.11-18 サワンワッタナー国王とプーマ首相がソ連を訪問
- 2.12 中立派軍のケッサナ・ウォンスーワン(Ketsana Vongsouvanh)大佐がジャール平原で殺害される
- 3.19 アメリカは緊急事態に備えるため、タイと特別後方支援活動協定を結び、タイ・ラオス間の戦略通信網の改善と、タイのナコーンパノム空軍基地の機能向上を図る (Th)
- 3.30 コン・レ軍へのアメリカの支援が再開される (Ste)
- 3.31 コン・レ大尉の中立派軍が分裂し、ドゥアン・スンナラート (Deaun Sunnalath) 大佐と衝突が始まる
- 4.1 中立派のキニム・ポルセナ外相が暗殺される
- 4.4 プーマ首相、ジャール平原で3月末以来中立派軍と反乱軍の戦闘が行われていると発表
- 4.8 プーマ首相、ヴィエンチャンで緊急閣僚会議を開催し、ジャール平原へ国際監視委員会の派遣を要請
- 4.8 スパーヌウォン、パテート・ラーオ管理下にあるカンカーイにヴィエンチャンの治安悪化を理由に移動
- 4.12 ヴィエンチャンで中立派のカンティ・シパトン(Khanti Siphatong)大佐が暗殺される
- 4.19 プーミ・ウォンウィチットがカンカーイに移動
- 4.19 プーマ首相、ジュネーブ会議共同議長国にジャール平原での停戦違反に介入するよう要請
- 4.20 コン・レ軍、シェンクアンの飛行場をドゥアン大佐・パテート・ラーオ軍に失う
- 4.21 プーマ、イギリス・ソ連両大使と共に、カンカーイに向かいスパーヌウォンと会談 (桜井・石澤)
- 5.3 国際監視委員会のヘリコプターが破壊される
- 5.12 アメリカ国務省、コン・レ軍への武器支援を発表
- 5.17 ジャール平原で再び戦闘開始
- 5.中 この頃までに北ヴィエトナムはヴィエトナム人民軍 11 個大隊、5000 人の兵士をホー・チ・ミンルート防衛のため配備 (C)
- 6.6 プーマがパテート・ラーオと北ヴィエトナムの共謀を非難する (C)
- 6.14 イギリス・ソ連両大使、カンカーイでスパーヌウォンと会談
- 6.25 セノ(Seno)にあるフランスの軍事基地がノサワン軍に譲渡される (Th)
- 7.3 プーマ側代表と愛国戦線代表がヴィエンチャンで予備会談を行う
8. アメリカによるラオス王国空軍の改善が始まる。アメリカは6機の T-28 を提供し、空軍訓練チームを派遣
- 1963 9.9 愛国戦線幹部への夜間襲撃
- 12.20 3 派代表がジャール平原で会談し、3 殿下による会談の早期開催を呼びかける
- 1964 1.17-20 サムヌアでプーマとスパーヌウォンが会談
- 1.末 パテート・ラーオ、ラオス中部で攻撃再開
2. パテート・ラーオ、ジャール平原でコン・レ軍への攻撃再開
2. アメリカの特別空挺部隊、ラオス人とタイ人パイロットの訓練をタイで開始 (Th)
- 2.25 北ヴィエトナム軍、ジャール平原にあるモン族ゲリラの牙城を攻撃
- 3.14 ノサワン将軍と南ヴィエトナムのグエン・カン(Nguyen Khanh)将軍が南ヴィエトナムのダラトで秘密会談
- 4.1 プーマ首相、北ヴィエトナム訪問
- 4.6-11 サムヌアでラオス愛国戦線第 2 回全国大会開催。中央委員会の選出や 10 項目の綱領を採択
- 4.8 プーマ首相、中国訪問

- 4.17 プーマ、スパーヌウォン、ノサワンの3派首脳がジャール平原で会談。連合政府の条件として提出されたルアンババーンの非軍事化と中立化にノサワン将軍が反対し合意に至らず
- 4.19 ヴィエンチャン軍管区指揮官クバシット・アバイ(Kouprasith Abhay)大佐とシーホー・ラーンブタクン(Siho Lamphouthacoul)警察長官の右派によるクーデターが発生。プーマを拘束し、革命委員会の設立を発表
- 4.22 カンボジアのシアヌーク殿下がラオス問題解決のための国際会議開催を呼びかける
- 4.22 プーマが釈放される
- 4.23 国際圧力により、革命委員会は連合政府の継続を発表
- 4.27 ジャール平原北東部で右派とパテート・ラーオが衝突
- 5.2 プーマ首相、右派と中立派の統合を発表
- 5.4 ジャール平原でプーマとスパーヌウォンが会談するが物別れに終わる
- 5.13-22 中国、フランス、ソ連は国際会議の開催を支持するが、アメリカとイギリスが拒否
- 5.13 コン・レ軍と右派勢力の公式統合。コン・レ軍へのパテート・ラーオの攻撃が行われ、プーマが国際監視委員会に調査を要請する
- 5.16 コン・レ軍が分裂、11 個大隊の内 6 個大隊がドゥアン大佐側へ離脱
- 5.17 パテート・ラーオ、アメリカがパテート・ラーオ解放区に爆撃を行っていると言主張
- 5.19 アメリカが南部ラオスで偵察飛行を開始する (C)
- 5.21 アメリカはプーマ政府の要請によりラオス上空の偵察飛行を行っていると言発表
- 5.24 カンカーイでラオス青年同盟設立大会開催
- 5.25-26 エア・アメリカ攻撃部隊、ジャール平原を攻撃 (C)
- 5.28 プーマ、ヴィエンチャンに不在の中立派閣僚を交替する
- 5.30 スパーヌウォン、ヴィエンチャンに残留している愛国戦線閣僚の帰還を要請。プーマ首相は閣僚の不在中、他の閣僚が兼任すると発表
- 5.31 国際監視委員会、フランス、インド大使がカンカーイを訪問しスパーヌウォンと会談
- 6.3 スパーヌウォンは共同議長国に書簡を送り、プーマを連合政権の首相として認めないことを伝える
- 6.6 パテート・ラーオ、偵察飛行を行っていたアメリカ機を墜落させたと発表
- 6.9 アメリカ空軍 F-100 戦闘機 8 機がシェンクアンを攻撃する
- 6.11 タイ人兵士が操縦するアメリカの T-28 ヘリコプターがカンカーイを爆撃。中国経済文化ミッションの 1 人が死亡
- 1964 7. アメリカの支援により、王国軍がジャール平原でパテート・ラーオを攻撃
- 8.5 アメリカ軍、北ヴィエトナムを爆撃（桜井・石澤）
- 8.6 アメリカ議会、ジョンソン大統領に特別権限を付与（桜井・石澤）
- 8.8 スパーヌウォン、プーマにパリでの 3 者会談を提案
- 9.21 3 者会談がパリで開始。プーマ首相とスパーヌウォンはジャール平原を中立派勢力の管理に置くことで合意するが、右派のブン・ウムが反対
- 10.6 アメリカ国務省と国防省、ヴィエンチャンのアメリカ大使館にラオスを通過する北ヴィエトナムの侵入ルート（ホー・チ・ミンルート）に空爆を行うよう指示
- 10.14 プーマの承認により、アメリカがホー・チ・ミンルートへの爆撃を開始
- 12.14 4 機のアメリカ空軍 F-105 戦闘機、11 機の偵察機と空中警戒待機、東部ラオスのナペ(Nape)を攻撃 (C)

- 1965
1. 右派軍部内での対立が表面化
 1. ノサワン将軍を含む右派の全将軍による会議がルアンパバーンで開催
 - 1.31 無名のブーンルート・サイコシー(Bounleut Saycocie)大佐が政府ラジオ局と競技場を占拠する。連合政府には反対せず軍の再組織化を要求
 - 2.3 ノサワン将軍とシーホー長官がクーデターを試みるが失敗。タイに逃亡する
 - 2.7 アメリカ軍がヴィエトナムで北爆開始。1965年の間に、アメリカは北部ラオスに4548回の空爆を行う (Th)
 - 3.7 アメリカ海兵隊7個大隊3500人がダナンに到着。陸軍がヴィエトナムに直接介入
 - 3.9 パテート・ラーオと北ヴィエトナム軍、サワンナケートにある王国政府軍の訓練所を攻撃 (L/Z)
 - 6.23 愛国戦線、プーマ首相はアメリカの傀儡であるとするメモを発表
 - 7.18 王国政府支配地域で国会議員選挙が行われる。愛国戦線は排除される
 - 9.6 新内閣が発表され、プーマが首相、国防相、外務相、スパーヌウォンが愛国戦線側の副首相、右派の副首相にはレウアム・インシシマイ(Leuam Insisiengmay)が就任
 10. 3派代表による会談がヴィエンチャンで再開される
 - 10.1 パテート・ラーオはラオス人民解放軍(Lao People's Liberation Army)に改称(Th) (以下、混乱を避けるため、人民解放軍ではなくパテート・ラーオを引き続き使用することとする)
 - 10.13 サムヌアで愛国戦線と愛国中立派による政治協商会議開催。4項目と5原則からなる計画を発表
- 1966
- 1.6 愛国戦線設立10周年を記念する代表者会議開催。第2回全国大会で採択された10項目を再採択
 - 1.24 南ヴィエトナムのグエン・ヴァン・ティエウ(Nguyen Van Thieu)大統領、アメリカと南ヴィエトナムが定期的にラオスのホー・チ・ミンルートに爆撃を行っていることを認める (Th)
 - 2.19 パテート・ラーオと北ヴィエトナム軍、ジャール平原北東のCIAの活動拠点でもあるナカン(Nakhang)を攻撃
 5. サワンワッタナー国王とプーマ首相、ソ連を訪問
 - 6.2 王国政府タオ・マ(Thao Ma)将軍、サワンナケート空港を占拠
 - 7-8 王国政府がパテート・ラーオ支配地域であるルアンパバーン北部のナムバク(Nam Bak)を奪還
 - 9.17 国会が予算を否決、プーマ首相は国会を解散し総選挙実施を決定
 - 10,21 王国軍タオ・マ将軍が反乱。ヴィエンチャンの司令部を爆撃しタイへ逃亡する
 - 11.21-27 愛国戦線と愛国中立派が第2回政治協商会議を開催
- 1966
- 11.24 コン・レ将軍が失脚
 - 12.15-21 愛国戦線中央委員会がサムヌアで開催され、スパーヌウォンが軍事、政治、経済状況を報告
- 1967
- この頃までにアメリカは、ホー・チ・ミンルート切断には50万人のアメリカ軍を3カ月投入しなければならぬと推定
- 1.1 王国政府支配地域で国会選挙を実施するが愛国戦線は参加を拒否
 - 2.1 パテート・ラーオ、ルアンパバーン空港を攻撃
 - 3.1 中立派軍、コン・レに代わりソムブット・ソッフアワン(Sompeth Sotfavanh)大佐が司令官に就任
 - 5.1 プーミ・ウォンウィチット愛国戦線書記長、B52による解放区への爆撃に抗議(桜井・石澤)
 - 9.7 プーミ書記長、アメリカによる解放区への爆撃停止を求める覚書をイギリスとソ連に送る(桜井・石澤)

- 10.12 プーマ、ラオス領内に4万の北ヴィエトナム軍がいると主張(桜井・石澤)
- 10.13 プーマ、北ヴィエトナムによるラオスへの軍事介入を非難し、国連に訴える
- 10.31 パテート・ラーオ、タイ軍がラオスに侵入したと主張
- 12.25 ムアン・パランにあるアメリカのレーダー施設がパテート・ラーオに占拠される
- 1967-1968 アメリカは35万トンの爆弾をラオス全土に投下 (C)
- 1968 1.6 愛国戦線中央委員会、パテート・ラーオ通信社(Khaosan Pathet Lao)を設立
- 1.12 パテート・ラーオと北ヴィエトナム軍、プーパティ(Phou Pha Thi)を攻撃
- 1.30 解放軍、南ヴィエトナム全土で攻撃を開始(テト攻勢)(桜井・石澤)
- 1.13 パテート・ラーオ、1966年に失ったナムバック地域を奪還
- 3.11 北ヴィエトナムの支援を受けたパテート・ラーオ勢力がプーパティにあるアメリカのレーダー基地を占拠
- 3.19 スパースウォン、サムヌアで演説を行う。愛国戦線と北ヴィエトナムが緊密な関係にあること、両国の革命運動が相互関係にあることを認める (L/Z)
- 4.3 北ヴィエトナム、アメリカの交渉提案を受け入れる
- 7.22 愛国戦線、ラオス人民による問題解決を要求
- 8.9 愛国戦線中央委員会拡大会議開催。抗米闘争の強化を訴える(桜井・石澤)
- 9.7 愛国戦線と愛国中立派による第3回政治協商会議開催
- 10.24 愛国戦線放送、プーマの和平意向はアメリカの侵略を覆い隠すべしと非難(桜井・石澤)
- 10.25 愛国戦線、第3回臨時全国大会を開催し12項目からなる政治綱領を採択
- 12. ワン・バオ軍、プーパティを奪還
- 1969 1. ヴィエトナムのアメリカ軍、54万9500人と最大に達する(桜井・石澤)
- 1. 北ヴィエトナム軍、プーパティのワン・バオ軍を撃退
- 1.26 ヴィエトナムに関する第1回パリ拡大会議開催
- 1.31 ソ連大使、プーマ首相の親書を携えサムヌアへ出発
- 2.12 プーマ、アメリカ機がラオス領内を爆撃していることを確認
- 3.1 北ヴィエトナムの174連隊の2個大隊と148連隊の3個大隊、ナカンから約60km南西にあるワン・バオ軍の拠点を攻撃
- 3.11 北ヴィエトナム工作兵、ルアンパバーンの飛行場を攻撃
- 4. 愛国中立派が第1回全国大会を開催
- 4.23 王国政府軍、シェンクアンを占拠
- 5. レ・ヴァン・ヒエン(Le Van Hien)北ヴィエトナム大使がプーマ首相と会談。アメリカによるホー・チ・ミンルート爆撃への承認取り下げと引き換えに、北ヴィエトナムはラオス北部の攻撃を停止し、軍の一部を撤退させることを提案
- 1969 5.25 パテート・ラーオ、シェンクアンを奪還
- 6. 王国政府軍とパテート・ラーオによるシェンクアンを巡る戦闘が激化
- 6.11 愛国中立派が行動綱領発表
- 6.27 パテート・ラーオ、王国政府中立派のジャール平原での拠点ムアン・スイを占拠
- 7.21 サムヌアで愛国戦線と愛国中立派による大衆会議開催
- 8.9 ワン・バオ将軍率いるモン族勢力がジャール平原の一部を奪還
- 9.3 ホー・チ・ミン死去。
- 9.8 王国政府軍、サワンナケート東部ムアン・ビン(Muang Phine)を占拠
- 9.12 アメリカの支援により、王国政府軍がジャール平原を奪還
- 10.2 愛国戦線報道官、ヴィエンチャンのプーマ政府は正統な政府ではないと繰り返し発表

- 10.29 人民解放軍が8つの規律を発表
- 11.3 アメリカのニクソン大統領、戦争のヴェトナム化を宣言
- 12. ホー・チ・ミンルートを2万5000台のトラックが往来
- 12.15 アメリカ上院、ラオスとタイにおけるアメリカ軍の戦闘禁止を可決（桜井・石澤）

- 1970
1. 北ヴィエトナム、ジャール平原を攻撃 (C)
 - 2.3 王国政府がジャール平原の中立化を提案
 2. ホー・チ・ミンルートを往来するトラックが4万 5000 台に達する
 2. パテート・ラーオ、北ヴィエトナムの支援によりジャール平原を奪還
 - 2.24 パテート・ラーオ、北ヴィエトナム軍の支援によりジャール平原西側のムアン・スイと飛行場を奪還
 - 2.28 プーマ、イギリスとソ連にラオス問題についてジュネーブ会議と同様の会議を開催するよう要請
 - 3.6 ニクソン大統領、アメリカによるラオスへの空爆を公式に認める。そして、ジュネーブ協定調印国間での協議を呼びかけたことを発表
 - 3.6 愛国戦線がラオスの政治問題解決に関する5項目案を発表
 - 3.8 スパーヌウォンが平和的解決に関する意見交換を求め、プーマに1969年2月以来のメッセージを送る
 - 3.11 ヴィエンチャンの愛国戦線代表ソット・ペトラシー (Sot Phetrasy) は、提案されている和平会談はアメリカのラオスへの爆撃停止が条件と発表
 3. パテート・ラーオ、北ヴィエトナムの支援により北部での攻撃を再開し、ワン・パオ将軍の拠点に迫る。ワン・パオ軍はジャール平原の南西部に退却
 - 3.18 カンボジアでクーデターが起こり、シアヌーク政権崩壊
 - 3.22 スパーヌウォンからの手紙がプーマに届く。和平のための5項目案を繰り返し訴えたが、プーマは拒否
 - 4.21 レ・ズアン(Le Duan)、モスクワでインドシナ統一戦線の形成を発表
 - 4.24-25 インドシナ人民首脳会議開催。国家の解放と防衛はその国の人民の問題であるという原則、要請に従って相互支援を行うことで合意
 - 4.28-29 パテート・ラーオ、アッタプーを占拠
 - 4.30 アメリカ・南ヴィエトナム軍がカンボジアに侵攻。北ヴィエトナムのベースキャンプを破壊
 - 6.9 パテート・ラーオがサラワンを占拠
 6. プーマとパテート・ラーオ代表による接触がヴィエンチャンで開始
 - 6.10 スパーヌウォン、アメリカの爆撃停止後に和平会談を開催することを提案
- 1970
- 6.17 王国政府、愛国戦線との接触継続を決定 (桜井・石澤)
 - 8.3 愛国戦線特使がスパーヌウォンの親書をプーマに手渡す
 - 8.13 王国政府が和平交渉代表団を決定
 - 9.2 スパーヌウォン、愛国戦線の交渉代表団を決定
 - 10.9 アメリカ、ホー・チ・ミンルートの爆撃を強化
 - 11.21 アメリカ、ヴィエトナムで大規模な北爆を行う (桜井・石澤)
- 1971
- 2.8 アメリカの支援を受けて南ヴィエトナム軍が Lam Son 719 作戦を展開。ラオス南部セボンに侵攻
 - 2.9 プーマ、全外国軍の撤退を要求する声明を発表
 - 2.19 ラオス侵攻の南ヴィエトナム軍、壊滅的打撃を受ける (桜井・石澤)
 - 4.6 反プーマクーデター発覚
 - 4.26 愛国戦線と愛国中立派が会談、2項目和平案発表
 5. ワン・パオ軍、ジャール平原を奪還
 5. パテート・ラーオ勢力、ボラヴェン高原を占拠 (Th)
 - 5.12 愛国戦線、ラオス全土への空爆の無条件、即座の停止を要求し、新しい和平案を提示(Th)

- 5.31 プーマは5月12日の愛国戦線による提案を拒否
- 6.22 スパーヌウォン、新2項目和平案を発表
- 10.10-15 愛国戦線、サムヌアで全国大会を開催
- 12.18 パテート・ラーオ、ジャール平原で攻勢
- 1972 1.2 総選挙実施 (S)
- 1.12 パテート・ラーオ、ロンチェン(Long Cheng)を攻撃
- 2.3-6 フアバン県ヴィエンサイ (Viengsai) で第2回人民党大会開催。人民党は人民革命党に改称
- 5.22 右派が国会でプーマ政府打倒を試みるが、アメリカはプーマを支持 (S)
- 7.15 愛国戦線特使、スパーヌウォンの書簡を携えヴィエンチャンに到着
- 7.19 アメリカとヴィエトナム民主共和国、パリで秘密会談開始
- 7.24 プーマ、愛国戦線提案の5項目案を交渉の基礎とすることを受け入れる
- 9.22 愛国戦線、無条件の和平会談を呼びかける
- 10.14 愛国戦線と愛国中立派の和平交渉団がヴィエンチャンに到着
- 10.17 第1回和平会談開催
- 10.21 ハノイに愛国戦線代表部発足
- 10.28 プーミ・ウォンウィチット書記長、和平交渉代表団としてヴィエンチャンに到着
- 12.12 愛国戦線、和平協定案を提示
- 12.18 アメリカ、ヴィエトナムへの北爆再開
- 12.26 11回目の和平会談開催
- 1973 1.15 ニクソン大統領、北爆中止を命令
- 1.27 ヴィエトナムに関するパリ和平協定妥結
- 1.31 第1回和平秘密会談
- 2.3 プーミ・ウォンウィチット愛国戦線交渉団顧問、ヴィエンチャンに到着
- 2.9 アメリカ大統領特別補佐官キッシンジャー、ヴィエンチャンを訪問しプーマと会談
- 2.10 キッシンジャー、ハノイを訪問
- 2.21 ラオスにおける平和回復と民族和合に関する協定調印
- 2.22 正午より停戦が発効
- 2.23 プーマ、アメリカに再爆撃を要請。パテート・ラーオ解放区の一部を爆撃
- 1973 2.28 第1回政治・軍事合同委員会会議開催
- 4.11 解放区に師範大学開校
- 8.20 タイに逃亡していたタオ・マ將軍がヴィエンチャンに戻りクーデターを起こすが、数時間で鎮圧される
- 8.23 プーマが閣僚や29人の將軍と会談。議定書草案を検討
- 9.14 ラオスにおける平和回復と民族和合に関する協定付属議定書調印
- 10.12 ヴィエンチャン中立化のため、愛国戦線側の要員が到着
- 11.6 国会、和平協定と付属議定書を承認
- 11.23 和平協定実施のため、第1回中央合同委員会会議開催
- 1974 3.14 ヴィエンチャンの警察権を合同警察に委譲 (桜井・石澤)
- 3.22 人民革命党結成19周年記念、カイソーン書記長が書簡を発表 (桜井・石澤)
- 3.27 首都ヴィエンチャン、王都ルアンパバーン中立化のため、合同軍事司令部に防衛権を委譲 (桜井・石澤)
- 4.3 スパーヌウォンが解放区からヴィエンチャンに到着
- 4.4 閣僚と政治諮問評議会議員がルアンパバーンに向かう

- 4.5 プーマを首相に第3次連合政府が成立
- 4.25 政治諮問評議会第1回全国会議開催（桜井・石澤）
- 5.11 新連合政府、愛国戦線側の閣僚の反対により、伝統的に開催されていた憲法記念日の国会開会を中止
- 5.22 タイ軍、ラオスから最終撤退
- 5.24 政治諮問評議会が18項目からなる政治綱領を採択
- 6.3 アメリカの軍事要員がラオスを出発
- 6.4 北ヴェトナム軍が撤退期限日に従わず、3万8500人を駐留させているという報道
- 6.5 この日までにアメリカの軍事要員は30人となり、民間人は15人となった
- 6.21 王国政府軍参謀、サワンナケートに集まり退却について協議を行う
- 7.5 カムバイ・ブツバ(Khamphay Boupha)、ヴェトナム民主共和国特命全権大使に任命される
- 7.9 国会で北ヴェトナム軍の駐留に反対するデモが行われるが、それに対するカウンターデモも行われる
- 7.10 連合政府閣僚会議が開催されたが、両派は合意に至らずプーマ首相が辞意を表す
- 7.12 プーマ首相が心臓発作で倒れる
- 7.27 スパーヌウォン、王国政府軍将校とシソーク・ナ・チャンパーサク(Sisouk na Champassak)の家で会談
- 8.19 ヴィエンチャンで労働者や交通警察によるストライキ
- 8.25 プーマ首相、療養のためフランスに出発
- 9.2 マハソット(Mahasot)病院職員によるストライキ
- 9.18 北ヴェトナムと経済協力協定調印（桜井・石澤）
- 9.19 両派が戦争捕虜を釈放。173人の北ヴェトナム人と150人のタイ人が含まれる
- 9.29 パテート・ラーオが44人の戦争捕虜を釈放する
- 10.12-24 国営ラオス電力(Electricité du Laos)でストライキ
- 10.25 フェイサイ(Houei Sai)で給料未払いの王国軍兵士が反乱
- 11.1 プーマ首相がフランスから帰国
- 11.4 ヴィエンチャンのリセ（高等学校）で生徒によるストライキ
- 11.6 プーマ、ヴィエンチャンの自宅で行われた歓迎会で、平和への協力を呼びかける
- 1974 11.19-25 連合政府成立後初の愛国戦線中央委員会が行われる
- 12.2 ルアンパバーンのリセで生徒によるストライキ
- 12.4 第2回政治諮問評議会全国会議開催
- 12.6 ルアンパバーンで閣議開催。国会の解散と90日以内の選挙実施で合意
- 12.15 プーマとスパーヌウォンが会談。18項目の政治綱領について合意
- 12.24 フェイサイで再び給料未払いの王国軍兵士による反乱
- 1975 1.6 南部タケークで公務員・学生によるデモ
- 1.14 バクセーでデモが発生
- 1.18 プーマ首相、タケークでのデモ指導者の逮捕、全てのデモの禁止を命じる
- 2. パテート・ラーオと王国軍の間で戦闘が勃発
- 2.6 パテート・ラーオがサラブコーンで王国軍を攻撃、ワン・パオ将軍による反撃が行われる
- 3.5-9 地方県副知事二人が殺害される
- 3.25 フェイサイの青年がUSAIDの活動や空港を妨害
- 3.27 スパーヌウォン、4月に解放区を訪問しよう国王を招待。パテート・ラーオと王国軍の戦闘が活発になる

- 4.10 サワンワッタナー国王、国会を解散する勅令に署名 (桜井・石澤)
- 4.11 パテート・ラーオがサラブーコーンでワン・パオ将軍に攻撃
- 4.15 ワン・パオ将軍がパテート・ラーオを攻撃。プーマは王国軍に戦闘を行わないよう命令する
- 4.23 政府は両者の撤退と協定実施合同委員会による調査を呼びかける
- 4.29 国王がパテート・ラーオ解放区を4日間訪問
- 5.1 メーデーにヴィエンチャンでデモが行われ、右派政治家の解任を要求する
- 5.5 人民革命党中央委員会が大衆蜂起を呼びかける
- 5.6 ブン・ウムが手榴弾によって殺害される
- 5.8 王族や右派政治家とその家族、外国人等がタイに避難 (桜井・石澤)
- 5.9 5人の連合政府右派閣僚(国防相シソーク・ナ・チャンパーサク、財政相ゴン・サナニコーン(Ngon Sananikone) 厚生相カムパイ・アバイ(Khamphay Abhay) 外務次官ティエントン・チャンタラシー(Tianethone Chantarasy) 公共事業次官フンパン・サイニヤシット(Houmphanh Saignasith)と5人の右派将軍が辞任
- 5.10 プーマ、ワン・パオ将軍を司令官から解任
- 5.11 プーマ、国民に平静を保つよう呼びかける (桜井・石澤)
- 5.14 ワン・パオ将軍がタイに逃亡。アメリカ国際開発局(USAID)がデモ隊によって攻撃を受ける
- 5.20 パテート・ラーオがサワンナケートに侵攻。タケークでは権力奪取
- 5.21 ヴィエンチャンのUSAIDがデモ隊によって占拠される
- 5.23 国立競技場でラオスの平和と統一のための集会開催 (桜井・石澤)
- 5.25 パテート・ラーオがチャンパーサクに侵攻 (桜井・石澤)
- 5.27 6月30日までにUSAIDを撤退させる7項目の協定にアメリカ代理大使が調印
- 6.17 ルアンパバーンで合同警察が解体
- 6.26 USAID 閉鎖
- 6.28 反米のデモ隊がアメリカ広報文化局(USIS)図書室を占拠
- 7. 警察や軍幹部がヴィエンサイの再教育キャンプに送られる
- 7.10 8つの県が人民委員会の支配に置かれる
- 7.30 ヴィエンチャン、ルアンパバーンの合同警察・軍が解体。軍内部に革命委員会が設立される
- 1975 8.5 サイニャブリー県が解放
- 8.15 フェイサイが解放。2万5000人のモン族とその他1万6000人がタイに逃亡
- 8.18 ラオス人民革命行政委員会がルアンパバーンで権力奪取
- 8.22 パテート・ラーオがヴィエンチャンに入る
- 8.23 ヴィエンチャンに人民革命行政委員会が設立される
- 9.3 新しい国旗に愛国戦線旗が決まる (桜井・石澤)
- 9.4 右派指導者に対する欠席裁判が行われ、6人に死刑宣告
- 10.12 人民革命党、サムヌアで独立30周年記念式典開催
- 11.5-13 郡レベルで地方人民評議会選挙が行われる
- 11.17 タイがラオス国境を閉鎖
- 11.20-23 県、特別市人民評議会選挙が行われる
- 11.28 ヴィエンチャンで王制廃止と人民民主主義体制を要求するデモ
- 12.1-2 全国人民代表者大会をヴィエンチャンで開催。連合政府と政治諮問評議会の解散、王の退位、ラオス人民民主共和国の樹立を宣言する。首相にカイソン人民革命党書記長、大統領にスパーヌウォン殿下が就任

